

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 根岸 洋

本論文は、東北地方北部の縄文時代から弥生時代にかけての歴史的変革の様相を、土器型式論と居住形態の実態等から、地域間関係網の再編の歴史として読み解こうと試みた意欲的かつ実証性の高い研究である。青森県垂柳遺跡に代表される弥生中期の水田遺構が検出されたことを契機として、本州最北端における弥生文化の導入過程に関する研究が活発化した。最近の研究では、弥生人の侵入による稲作文化の導入と拡散・定着という一方向的で単純な図式が否定され、むしろ東北縄文人の積極的な役割が評価されつつある。申請者は、こうした研究状況を肯定的に受け入れ、弥生文化の情報を積極的に摂取した縄文末期の集団の社会的・文化的動態を活写しようと試みている。

本論文は6部からなり、I部序論で申請者の言う「移行期」を定義し議論の内容を整理した後、II～III部では、対象地域の考古学的年代軸を確定させるために、土器型式学に基づいて、縄文晩期後葉(大洞 A' 式)から弥生中期(田舎館式)にかけての地域編年を構築している。特に、北九州起源の遠賀川系土器が、従来の主張とは異なり、そのほとんどが搬入ではなく模倣土器であること、そしてそれは東北晩期以来の情報交換網の延長の結果であることを明らかにしたことは注目される。続く、IV部では、秋田県下の遺跡群を対象に、集落形態の変化に基づいて縄文/弥生移行期の居住形態を検討し、赤色顔料の交易(V部)という具体的な資料の動態と合わせて、当該期の社会的変動を検討する。以上の分析を総合した結論(VI)では、当該期の大きな社会的変動が縄文/弥生の時代面期に一致しているのではなく、むしろ縄文晩期中葉/後葉、弥生前期/中期前半、弥生中期後半/後期という3回の面期を通じて連続的に認められることを明らかにした。

本論文は、これまでの当該期の研究が、弥生稲作農耕文化の受用という弥生化の発展段階論を前提として展開してきたことを批判的に検討するという視座から、土器型式論だけでなく、居住領域や流通ネットワークといった社会的側面からも照射することによって、より実態を明らかにすることを成功したと評価することができよう。膨大な資料を分析した結論は一定の説得力がもつが、それに比較して、居住様式の検討の一環として行った竪穴住居の居住人員に関する分析が、研究成果本体に果たした意味については言及が不足している。しかしながら、この点は、理論研究自体が遅れている分野でもあり、本研究の意義を損なうほどのものではない。

以上より、本委員会は、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。